５　　奇妙な女房車 　　　　　　　　　　未然形接続の助動詞②

「かちより顔を塞ぎて行くべきにはあらず。物はⅠきはめて見まほし。いかがすべき」と嘆きけるに、一人がいはく、「某大徳が車を借りて、それに乗りて見む」と。また一人がいはく、「乗り知らアぬ車に乗りて、殿ばらにあひ奉りて、引き落として蹴らるや、由無き死にをやせむずらむ」と。いま一人がいはく、「女車のやうにて見イむはいかに」と。いま二人の者、「この義Ⅱよかりなむ」といひて、かくいふ大徳の車、既に借り持て来ぬ。下簾を垂れて、三人袖も出ださずして乗りぬれば、心にくき女車になりぬ。

さて紫野ざまに遣らウせて行く程に、いまだ車にも乗らエざりける者どもにて酔ひぬれば、烏帽子をも落としてけり。牛の一物にて、早く引きつつ行けば、横なばりたる音どもにて、「いたくな早めそ」といひ行けば、同じく遣り続けて行く車ども、後へなる雑色ども、これを聞きて怪しびて、「この女房車の、いかなる人の乗りたるにA【　　】あらむ。音けはひ大きにて男音なり」と、すべて心得ずB【　　】覚えける。

【本文チェック】

①□ア～エの助動詞の、文法的意味・文中での活用形を〔　〕に書きなさい。

ア〔　　　　　・　　　　形〕　イ〔　　　　　・　　　　形〕

ウ〔　　　　　・　　　　形〕　エ〔　　　　　・　　　　形〕

②傍線部Ⅰ・Ⅱを現代語訳し、（　）に書きなさい。

Ⅰ（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

Ⅱ（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

③本文中の空欄【　】Ａ・Ｂに入る助詞を左から選び、（　）に書きなさい。

　【ぞ・か・も・こそ】

Ａ（　　　　　）　Ｂ（　　　　　）

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。＊〔数字〕はノート本冊での本文の行数を表す。

１　いたく〔８〕　　 ①（　　　　　　　　　）

　　　　　　　　　 　②（下に打消を伴って）それほど

２　な～そ〔８〕 　（～　　　　　　　　　　　）

問２　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　人だして問はするに、あらぬよしなき者の名のりして来たるも、かへすがへすもすさまじといふはおろかなり。（枕草子）

ア　無慈悲な　　　イ　理由のない

ウ　風情がない　　エ　無関係な

（　　　）

２　の・のたよりをかしく、うちあるも昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。（徒然草）

ア　心ひかれる　　イ　珍しい

ウ　ねたましい　　エ　頼りない

（　　　）

【文法力 ✚】

問３　次の傍線部の助動詞の、文法的意味と文中での活用形を答えよ。

１　ありて、言葉多からぬこそ、飽かず向かはまほしけれ。

（徒然草）

文法的意味（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

２　男はこの女をこそ得めと思ふ。（伊勢物語）

文法的意味（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

３　少納言よ、の雪いかならむ。　（枕草子）

文法的意味（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

問４　次の傍線部の助動詞の文法的意味を、後から選べ。

１　宮はよよと泣かれ給ふ。（源氏物語）

２　われ、人にさ思はれむ。（枕草子）

３　涙のこぼるるに、目も見えず、ものも言はれず。（伊勢物語）

ア　受身　　イ　可能　　ウ　自発

１　（　　　）　　２　（　　　）　　３　（　　　）

問５　次の空欄①～⑤に最も適当な語を入れよ。

　これが花の咲かAむをりは来Bむよ。（更級日記）

　助動詞「む」の意味は、基本的には〈～だろう〉の（　①　）である。しかし、Ａの〈花が咲くようなとき〉と直後に体言がきて連体形になり、〈～ような〉と（　②　）を表す場合もある。

　Ｂはここでは（　③　）動詞「来」の（　④　）形について、〈来よう〉という、話し手自身の（　⑤　）を表している。

①（　　　　　）　　②（　　　　　）　　③（　　　　　　　　　）

④（　　　　　）　　⑤（　　　　　）

【探究】鑑賞してみよう

問６　この話は笑い話であるが、どの点に面白みを感じるか。次から選んで、説明を加えよう。

ア　女房車のようにしたものの、おかしな体裁になってしまった点。

イ　策を練ったが、結局車酔いを起こしてしまった点。

ウ　大切な烏帽子まで落としてしまった点。　　エ　その他の点。

〔

〕

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝打消・連体　イ＝婉曲・連体　ウ＝使役・連用　エ＝打消・連用

②　Ⅰ＝非常に見たい　Ⅱ＝（確かに）よいだろう

③　Ａ＝か　Ｂ＝ぞ

問１　１＝はなはだしく　２＝ないでください

問２　１＝エ　２＝ア

問３　１＝願望・已然形　２＝意志・已然形　３＝推量・連体形

問４　１＝ウ　２＝ア　３＝イ

問５　①＝推量　②＝婉曲　③＝カ行変格活用　④＝未然　⑤＝意志

問６　観点　アの場合は女房車がどのようなものであるかという古典常識に触れること。イの場合はまだ車に乗ったことがなかったこと、ウの場合は烏帽子がどれほど大切なものであったのかを追加説明すること。エの場合は、具体的に面白みを感じた点を挙げ、詳しく説明すること。

【現代語訳】

問２　１　人を出してたずねさせると、そう（待っていたの）ではない無関係な者が名乗って来たのも、つくづく興覚めだと言うまでもない。

２　ぬれ縁や透垣の配置が趣深く、ちょっと置いてある道具類も古風で落ち着いて

いるのは、心ひかれると見えるものだ。

問３　１　があって、言葉数の多くない人とは、飽きることなく向かい合っていたい。

２　男はこの女を（妻として）得ようと思う。

３　少納言よ、香炉峰の雪はどのようだろうか。

問４　１　宮はおいおいと思わずお泣きになる。

２　私は、他人にそう思われたい。

３　涙がこぼれるので、目も見えず、ものも言うことができない。

問５　この梅の花が咲くころにはきっと来ようよ。